

イギリス封建制度下における alderman について

小林 絢子

1. 1

広義の封建制度とは「中世社会に普及した主従間の双方向契約と恩貸地制とが結合して生まれた社会風習を指す」と一般的には定義されている。⁽¹⁾ 西洋のそれはメロヴィング朝（481—751）から次のカロリング朝への時期にその諸王が国家的統一を再建する為に豪族や官僚と封建契約を結び、彼らの所領や官職を封土・知行として容認又は追認し、それとひきかえに彼らに誠実義務を負わせたことにはじまった。⁽²⁾

イギリスの封建制度はこのヨーロッパ大陸流の封建制度がノルマン人による征服に伴って導入されたものといわれる。確かにウィリアム1世は Domesday Book（1086年）と呼ばれた分厚い土地台帳を作らせて、イギリス土着の各領主の持つ詳細な土地・家畜財産や人的資源を把握し、ソールズベリーで彼らに忠誠誓約を行わせた。⁽³⁾ これは中央集権的封建制度のはじまりであり、それ以来王を頂点とする諸侯（baron）や聖職者達が中世のイギリス支配を確立した。しかしイギリスの初期の封建制度はこのように一国の強大な王権の支配のもとにヒエラルキー状に世俗と聖職の貴族が並ぶというものではなかった。上述したように西洋の封建制度とは豪族について彼らの所領を封土・知行として容認または追認したことに始まる。「容認」とか「追認」というのは既にあったもの又は事柄を改めて認めるという行為なので、ノルマン征服以前にイギリスには封建制度の基となる土地の領有や官職の保持は行われていたことになる。つまり領主と ceorl と呼ばれた領民との

間に既に恩貸地制を中心とした支配関係があったことがわかっている。このような社会は初期アングロ・サクソン型の封建社会といえることができる。

1. 2

アングロ・サクソン社会は周知のように5世紀から台頭してきたゲルマン民族の一派であるアングル人・サクソン人・ジュート人の渡来によってはじまった。その頃イギリス島ではすでにブリトン人（ケルト民族）や（アングル・サクソン人渡来時には撤退していたが）ローマ人によって耕作が行われていた。ケルト的ブリトンの耕作方式は小さな囲い地耕作であり、ローマ式のそれは広大な開放耕地をもつ方形耕作であった。ローマ領主たちはこの開放耕地を隷農を使って自分の資力と考えて運営できた。⁽⁴⁾ローマ領主のあとに入ってきたアングロ・サクソン人は親族集団をひきつれていたので、その共同体構成員に分け前地を割り当てるというケルト的農耕方式にまず親しみ、それから耕作用具や家畜が共有できて、より効率的なローマ式耕地制を取り入れていったらしい。

時が経つにつれてそのアングロ・サクソン共同体の中でも貧富の差や肉体的精神的力量の差が顕著になってきて、私的な保護や支配関係もあらわれてきた。首長や豪族の側近達の間で封建的主従関係が主君への忠誠と復讐の誓約という風習とともに流行してきた。⁽⁵⁾このようにして封建制がゆるやかな形ではじまり、自由農民も隷農もその下に次第に組み込まれていったのである。

初期アングロ・サクソン型封建制度の中での首長や豪族は英語でさまざまな呼び方をされていた。ウィリアム王がノルマン王朝をたてる以前にイギリスではすでに王朝があったのであるから、その王と廷臣、豪族、首長たちとの関係を示す身分上の名称をはっきりさせないことにはその社会の構造が見えてこないのので、以下に *alderman* を中心として、その称号を持つ人の役割、機能を見ていきたい。

2. 1

アングロ・サクソン七王国（ノーサンブリア、マーシア、イースト・アングリア、ケント、エセックス、サセックス、ウェセックス）成立初期から9世紀初めまでは王国は互いに戦ったり、結婚政策や戦争協力で同盟したりしていて、イギリスに統一王朝は存在しなかった。各王国の長は初めは *Bretwalda* と呼ばれていた。OE (=古期英語) で *Brettas* は *Bret* 即ち Breton 人の複数形である。Breton 人はブリテン島に住むケルト人を指す。*walda* は OE *wealdan* 即ち *wield* 「支配する」を意味する。従って *Bretwalda* は「ブリトン人を支配する人」ということになる。アングロ・サクソン人渡来後この語は次第に使われなくなり、OE *cyning* または *cyng* に取って代わられていった。ゲルマン語で **kuni gaz* は「種」という意味の 'kin' に通じる。現代英語の *king* は即ち人々の種のもとになる人という意味を含んでいる。そして王子は「息子」をあらわす *-ing* を語尾につけて *pe æpeling* と呼ばれる。固有名前のあとに *Æpelilng* と書かれることもある。

2. 2

ここまではわかりやすいが、問題はその下に位置する人々である。王の側近とか直接の臣下は *þægna* (*thegn, thane*)、*gerefa* (*reeve*) あるいは単に *his man* と呼ばれ、王の相談相手としての重臣は *witan* (*wise* と関係のある「物知りの人」という意味) と呼ばれた。しかし中央集権的封建制度以前の封建社会には荘園や限られた地域を支配する領主がたくさんいた。1・2で豪族とか首長と呼んだ人々である。彼らと王との関係は2者の勢力によって、そして時代によって異なる。そして彼らは大体 *alderman* (OE の標準形であるウェスト・サクソン語では *ealdorman, -mon(n)* 等) と呼ばれた。*alderman* は後にもっと階級の区別と国の内外の貴族の別がはっきりしてくると *earl* と同義語になってくる場合もあるが、初期アングロ・サクソン社会で地方豪族に対して広範囲に使われた呼称であった。*lord* も古い物語に

はよく出てくる「領主」を指す単語であるが、これは地位の呼称というよりも自分が使える「主君」という程度の日常用語で、上は神から下は「夫」まで指す。ここでは alderman についてその封建制度上での地位を見ていく。

アングロ・サクソン七王国のうちのウェセックス王国はマーシア王国の隆盛をおさえてエグバート王（在位802—839）の時代に英国一の強大な王国になった。ノーサンブリア、ケント、エセックスの諸国も支配下におき、838年にはデーン人と結んだコーンウォール人もおさえた。その後デーン人の来襲は厳しさを加え、エグバートの孫のアルフレッド大王（在位871—899）はデーン人の王グズラムに対する勝利にもかかわらず、デーンロウ部分をデーン人に割譲しなければならなかった。アルフレッドの孫のアゼルスタン王（在位924—939）の時代になってようやく全英の制覇がなしとげられたことは有名である。そしてこのアングロ・サクソン王国時代の alderman については次のような記述がある。

ウェセックスでは各種族の首長、豪族に由来するエアルダーマン（伯）達の管轄圏が scir (shire)、州とよばれており、州は移住期の種族的定住時代にまで遡りうるような自主的な起源をもつものであったが、しかしまた、そうした自生的起源とは別に、各地に散在していた王領地の管理のためにアルフレッド王がそれぞれの王領地においた王の代官の行政管圏が、王政の発展とともに王朝都市中心に次第に拡大していった scir (shire)、州とよばれるようになったという発展もあった。⁽⁶⁾

つまりアルフレッド王の時代に alderman は地方の豪族を指す場合と中央派遣の代官を指す場合の2つがあったということである。任期などの決まりもない時代だったので、後者が長期間任地にいれば、次第に土着化したであろうし、領民との関係にも差違が生じたであろうから、両者の区別は時が経つにつれて難しくなったに違いない。

3. 1

Alderman という語について、アングロ・サクソン時代の使われ方を調べた R.H. Loyn 著 “The Term ‘Ealdorman’ in the Translations Prepared at the Time of King Alfred” という論文がある。⁽⁷⁾ それによると、ここでは ealdorman は一般に主君を持つ首長ないし戦時の指導者を指し、heretoga (here は軍団、toga は首長) は独立性の強い軍隊の指揮官を指すという。ラテン語のそのような職種を示す語との対応関係は非常に複雑であるが、alderman に対するラテン語はおおむね 4 種類に分けることができる。

第 1 の場合は一般に「優越した人」を意味するもので、ラテン語では maiores (major) がそれにあたるが、文中にでてきてそれとわかる人物があればはっきりと対応語が書かれていない場合も多い。⁽⁸⁾ 「オクスフォード大辞典」によると alder は old one という意味の名詞で当然「卓越している人、物、事」を指す。⁽⁹⁾ ealdorburg (superior city) といえは各州の主都を指すし、「他人に対して ealdordom (high hand) をふるう」、という場合にも使える。

第 2 は ealdorman を王の重臣に対して使う場合である。ラテン語では patricius とか時には maior domus regiae といって王にも匹敵する尊称で呼ばれることもあるという。⁽¹⁰⁾

第 3 には裁判官、または軍の指揮官として地方にいる行政官を指す場合である。ラテン語では princeps といわれる。

第 4 は consul と呼ばれる heah ealdorman (high alderman) で、ノーサンブリアの軍最高司令官がラテン語でそのように呼ばれていた例がある。

Loyn はオロシウスの OE 訳 とビードの「英国国民教会史」の原文のラテン語を比べて alderma にあたるラテン語は praefectus が一番多く (6 回)、次いで comes (4 回)、tribunus (2 回)、dux (1 回)、praetor (1 回) と続く、という。一方、dux (duke) にあたる OE は ealdorman に限らない。latteow といわれていることもあり、この単語は現代英語いけば

leader, guide, general などがそれにあたる。⁽¹¹⁾ ラテン語からきた現代英語の形とその和訳を示せば次のようになる。(括弧内はラテン語形): major one「重要な人」(maiores)、patriarch「族長」(patricius)、regal「王の」(regiae)、principal one「主要な人」(princeps)、consul「領事」(consul)、prefect「長官」(praefectus)、tributary「属国の王」(tribunus)、duke「君主、公爵」(dux)。これらが alderman に対応するラテン語としてでてくるのであるから、alderman がいかに多種の「重要人物」の役職を含んでいたかがわかる。日本語では alderman の訳語は「州長、地方長官」⁽¹²⁾ あるいは「太守」などである。⁽¹³⁾

4. 1

アルフレッド王時代にはウエセックスとマーシアに約30人の alderman と呼ばれる豪族がいた。⁽¹⁴⁾ 中央の勢力が確立するに従って次第に各領地が統合され、大きい ealdordom (大伯領) が英国中央部、南部、ケント、東アングリアなどに割拠するようになった。そして従来の alderman はその大伯領の代官ともいうべき shire reeve として生き残った。しかし彼らは豪族には変わらないので、alderman と呼ばれつづけ、時には前述したように earl (OE eorl) とも呼ばれた。また国王直属の本来の意味での州 (shire) の代官 (reeve) である人物がしだいに王領地即ち城砦都市地区の州以上に領地を広げて君臨した場合、彼らは shire reeve と呼ばれた⁽¹⁵⁾ のでノルマン侵攻以前のアングロ・サクソン社会では alderman と shire reeve または reeve の区別ははっきりしなくなってくる。

alderman と earl の関係にも一言触れておきたい。earl はふつう「領主」とか「伯爵」と和訳されているが、OE ではもっと一般的な 'chieftain' の意味であった。OE eorl は OE ceorl (churl) 「一般自由民、最下層の自由民」⁽¹⁶⁾ の対極にあるとされている人々を指していた。吟遊詩、例えば "Beowulf" の中では武士または勇士を eorl と呼んでいる。⁽¹⁷⁾ しかしアングロ・サクソン時代も末の頃のクヌート王 (即位1016—1035) の時代になる

と北欧の jarl (これももとは 'chieftain, nobleman' の意味) という称号が入ってきて従来の eorl (earl) と合体する。ealdorman は「アングロ・サクソン年代記」においても1020頃から殆ど eorl で置き換えられていく。⁽¹⁸⁾ また、同年代記に出てくるノルマンディーあるいはフランスの領主は常に eorl と書かれている。ノルマン征服以後 eorl はラテン語 comes からきた count と同等の称号となり、後に整備された階級的称号の中ではその両者が「伯爵」の意味を持つようになったことは周知の通りである。

4. 2

ealdorman(n) という語が後期ウェスト・サクソン方言以外では ældorman(n)、aldorman(n) などと綴られていることについては、C.L.Wrenn や大沢一雄の研究で触れられているが、⁽¹⁹⁾ ここでは言語上のことよりも上記の年代記中の人物としての alderman についてさらに見ていくことにする。

署名主としてのみ、あるいはチャーターなどに列挙されているだけの alderman を除いて、「アングロ・サクソン年代記」には約50人の aldermen が登場する。大豪族らしい人々はマーシアの Ælfhere、Ælfric、Herebryht、ウェセックスの Æpelward、エセックスの Beorhtulf、Bryhtonop、Leosig、サセックスの Eadwine、ノーサンブリアの Beorhtfrif、東アングリアの Ulfcytel、ケントの Æpelwold、Ealhhere、Oslac 等であるが、彼らの他にもドーセットの Æpelhelm やバークスの Apelwulf、デヴォンの Ceorl、サマセットの Eanulf、サリーの Huda、ハンツの Osruc 等はデーン人との戦いに明け暮れた時代の勇士であった。アルフレッド王自身の対デーン戦は有名であるが、彼を助けて戦功をたてた alderman にはウイルツの Æpelhelm、サマセットの Æpelnop、マーシアの Apelred、デヴォンの Apered、Beocca などがいる。

豪族としての alderman は豪族同士の結びつきを強めるため、そして王族と結ぶため子女の結婚に気を配った。アルフレッド王の妻 Ealhswip も Gainas の alderman である Æpelred the Mickle の娘であったし、彼の息

子のエドワード長兄王の妻 *Æpelflæd* も *alderman* *Æpelhelm* の娘であった。エドワードの孫であるエドガー平和王の先妻も後妻もデヴォンなど近在の *alderman* の娘であった。⁽²⁰⁾ ウェセックス最大の豪族であった *Godwine* の娘 *Eadgip* がエドワード懺悔王の妻となった史実は有名であるが、*Godwine* は殆ど常に *Earl Godwine* と呼ばれている。次に、婚姻以外でアングロ・サクソン王朝と結びついて勢力を伸張させた豪族の例を見てみよう。

5. 1

国の守りを固め、アングロ・サクソン社会で勲功をたてた *alderman* はどのような人々であったのだろうか。対デーン戦に明け暮れた当時の英国にあって特に「ブルナンブルグの戦い」(937年)と「モールドンの戦い」(991年)⁽²¹⁾ は大きな戦いであった。テニソンの詩にも歌われブルナンブルグの戦いは「アングロ・サクソン年代記」に73行にわたる頭韻詩として収録されている。アンラーフに率いられたデーン軍とコンスタンティンに率いられたスコットランド兵がウェセックスのアゼルスタン王の軍勢に打ち負かされる有様がそこに勇壮に描かれている。しかしここでは *alderman* の階級に属する人の行動記述は特に見あたらない。

4. 2で列挙した *alderman* のうち、歴史的に有名な *ビルフトノス* (*Bryhtnōp*) が出てくるのは「モールドンの戦い」の詩中である。同年代記にはこの戦いについての記述はA写本の993年の項に数行出てくるだけである。エセックスのビルフトノスについては「ビルフトノスという *ealdorman* が軍勢を引き連れてきて戦った」(*him þær com togeanes Byrhtnōð ealdorman mid his fyrde & him wið gefeat*) ということと「彼ら(デーン人達)がそこでその *ealdorman* を殺した」(*hy þone ealdorman þær ofslogon*) ということが記されているだけである。

しかし「モールドンの戦い」そのものについては同年代記のこの箇所以外の所に、まとまった形で残されている。「ベオウルフ」の所収されている写

本集の中に375行の未完の詩として入っているので、ビルフトノスの英雄的な所業のほぼ全貌をそこで知ることができる。

エゼルレド無思慮王の時代（在位978—1016）の度重なるデーン人来襲の中でも特にこのロンドンの東北東、テムズ河上流のモールドンにおける戦いは悲惨なものであった。英軍を率いる同地の *alderman* ビルフトノスは戦いを好み、敵にわざと浅瀬にかかる橋を渡らせて自分たちの側に誘い込み、盾と槍で激しく戦闘を続けた後、英雄的な死を遂げるのである。彼の部下ゴドリック以下数名は卑怯にも逃亡したが、忠実な部下であるアフルウイネやレオヴスヌに励まされて英軍は盛り返す。しかし結末は、詩としては未完であるものの、史実としては英軍の敗北に終わっている。この詩においてビルフトノスは *hlaford*、*freatan*、*peoden*、*ealdre*（各4回）の他に *eorl* (*earl*) として10回登場している。代名詞や固有名詞は当然何回も出てくるが、代称としては *wine-dryhten*、*sinc-giefan*、*beag-giefan*、*gub-rinc*、*hilde-rinc*、*fierd-rinc*、*pone godan*、*his bettera* などが使われている。3. 1で述べたように *alderman* にはさまざまな呼び換えが可能であるが、文学上の適用例は上述のものである。

6. 1

最後に「アングロ・サクソン年代記」に戻って、そこに出ている王直属の *alderman* の例を挙げる。エアドリクはエーゼルレド王の晩年に王に重用された人物であるが、年代記の1015年の項に、彼が *alderman* のすぐ下の地位である *þa yldestan þægenas* (*the oldest thanes*) であるシイヴェルスとモルカルを欺して殺し、王も彼らの財産を没収した、という記述がある。（王の息子エドモンドはのちにシイヴェルスの未亡人と結婚した。）エアドリクはエーゼルレド王が死の床に伏すと王子エドモンドの敵クヌートに臣従した。エドモンドは父の死後（1016年4月）自分の不慮の死（同年11月）までの半年間勇敢な王としてクヌートと5回も戦っていた。エドモンドを恐れたエアドリクはエドモンドとクヌートの最後の決戦であったアシンダンの

戦いでは敵前逃亡した。その後戻ってきたエアドリクは両英雄の仲裁に入り、英国を2分割することを提案したといわれる。そして彼はマーシアの alderman となった。⁽²²⁾ しかしクヌートの即位の翌年に彼は殺された。このように複数の王者について上手にたちまわり、高い地位を得た者もいたのである。この他にもクヌートは祖国デンマークから連れてきた武士の中で戦功を挙げた者に earl の称号と土地を与えて一時代前の alderman に匹敵する階級に引き上げた。それらの貴族が前述した high reeve などと同列に考えられ、称号の複雑化が起きたのである。

以上、ノルマン人によるイギリスの新王朝が確立し、新しい秩序が出来る以前の身分称号としての alderman について考察した。アングロ・サクソン土着の領主を指す alderman が地方分権型封建制度から中央集権型のそれに移行する時期においてどのような位置におかれていたかという事を実例でもって調べてきたわけである。以上でもってイギリスの身分社会の初期の形的一端を明らかに出来たとしたら幸いである。

注

- (1) 京大西洋史事典編纂会「西洋史辞典」東京創元社 1949年「封建制度」の項。
- (2) 同上。
- (3) 野村直治編「概説 西洋社会史」有斐閣 1994年 105頁。
- (4) 富沢霊岸著「イギリス中世史」ミネルヴァ書房 1991年 41—42頁。
- (5) 同上 43頁。
- (6) 同上 49—50頁。
- (7) H.R. Loyn著 “The English Historical Review” 第48巻269号 513—525頁。
- (8) 同上 517頁。
- (9) J.A.H. Murray 他編 *Oxford English Dictionary*, Clarendon Press 1970年 s.v. alderman (sb.); s.v. alder (sb. 2).

- (10) Loyn, 518頁。
- (11) J.K. Clark-Hall編 *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*, Cambridge University Press, 1960, s.v. *latteow*.
- (12) 小稲義男編「大英和辞典」研究社 1980年 *alderman* の項。
- (13) 大沢一雄著「アングロ・サクソン年代記の研究」(蒼洋出版 1991年)における *alderman* の和訳。
- (14) 富沢 57頁。
- (15) 富沢 57—58頁。
- (16) 「大英和辞典」*churl* の項。
- (17) “Beowulf” 357行他参照。
- (18) 語源的に *ealdorman* の *ealdor-* と *earl* とは関係はない。
OED s.v. *earl*
- (19) C. L. Wrenn “‘Standard’ Old English Word and Symbol”, *Transactions of the Philological Society*, Oxford, 1933年 66—68頁、大沢 31頁、85頁。4.2では古英語名のみで知られている人物については古英語の綴りにしてある。
- (20) John Earl and Charles Plummer *Two of the Saxon Chronicles: Parallel* 第2巻 Clarendon Press, Oxford, 1972年 419—420頁、*Ordgar* 及び *Ordmaer*の項。
- (21) 「アングロ・サクソン年代記」では993年とされている。M.H.Abrams ed., *The Norton Anthology of English Literature* 第5版 第1巻 W.W. Norton社、ロンドン1962年 81頁及び平井正穂・海老池俊治著「イギリス文学史」明治書院 1976年 19頁では991年となっている。
- (22) Plummer 197頁、367頁。